The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Association Between Alcohol Consumption and Risk of Pancreatic Cancer: The Japan Public Health Center-Based Prospective Study
Author(s)	大北, 友紀
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96266
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

[Format-P02]

論　文　内　容　の　要　旨
Synopsis of Thesis

氏　　名 Name	大北 友紀
論文題名 Title	Association Between Alcohol Consumption and Risk of Pancreatic Cancer: The Japan Public Health Center-Based Prospective Study（飲酒と膵がん罹患の関連：多目的コホート研究（JPHC））

論文内容の要旨

〔目　的(Purpose)〕

飲酒と膵がん罹患リスクとの関連については、飲酒量、特に多量飲酒との関連を示すいくつかの研究結果が報告されているが、これまでに得られている研究結果は一致していない。そこで、観察研究のデータを用いて、研究デザインを工夫することにより、飲酒と膵がん罹患リスクの関連について評価を行った。

〔方法 (Methods)〕

多目的コホート研究であるJapan Public Health Center-based Prospective Study (JPHC)を用い、調査開始時のアンケートで飲酒習慣の回答が得られ、がん既往がないなど除外基準に抵触していない男女95,812人を対象として、2013年12月31日まで追跡を行った。

曝露となる飲酒量は、ベースライン時のアンケート回答の飲酒量あるいは飲酒習慣（頻度や酒の種類）の情報からエタノール量に換算したものを用い、飲酒量（エタノール換算量）に応じて6つのカテゴリー[飲まない、時々飲む、定期的に飲む (1-149g/週、150-299g/週、300-449g/週、≥450g/週)] に分類した。飲酒習慣の変わらない集団の定義には、ベースライン時に加えて5年後調査時のアンケート結果を用いた。

多変量調整Cox比例ハザードモデルにより、ハザード比（HR）および95%信頼区間（CI）を算出し、共変量を用いて調整を行った。

〔成績(Results)〕

1,969,101人年の追跡期間中に、598人（男性315人、女性283人）が膵がんと診断された。ベースライン時に、男性の23.1%が非飲酒者であるのに対し、女性の非飲酒者の割合（78.8%）は男性よりも高かった。飲まない/時々飲むの集団で非喫煙者の割合が高く、飲酒量の多いグループでは男性と女性の両方で現在の喫煙者の割合が高かった。飲酒により顔が赤くなるフラッシング反応が陽性を示す男性の割合は、飲酒量が増加するにつれて減少する傾向であったが、女性では異なる傾向であった。

男性および女性のいずれにおいても、ベースライン時の飲酒量と膵がん罹患リスクに統計学的有意な関連はみられなかった [男性 ≥450g/週 (多変量調整HR: 0.94、95% CI: 0.60-1.47)、女性 定期的に飲む (多変量調整HR: 0.61、95% CI: 0.37-1.00)]。男性において行ったフラッシング反応有無や喫煙習慣での層別解析においても、統計学的に有意な関連はみられなかった。

一方で、調査開始時から5年間に飲酒習慣が変化しなかった男性に限定した場合、飲酒量が多い集団において膵がん罹患リスクが統計学的有意に高いことが示された [男性 ≥300g/週 (多変量調整HR: 1.73、95% CI: 1.15-2.60)]。この傾向は、非喫煙者に限定した場合、より顕著に示された [非喫煙男性 ≥300g/週 (多変量調整HR: 5.48、95% CI: 1.57-19.16)]。過去喫煙や現在喫煙の集団においては、統計学的に有意な関連は見られなかった。

〔総　括(Conclusion)〕

JPHC Studyの日本人集団において、全体集団においては飲酒と膵がん罹患リスクに関連は見られなかった。しかしながら、5年間飲酒習慣が変わらない男性に限定した場合は、飲酒が膵がん罹患リスクに関連していることが示され、非喫煙者に限定した場合はその傾向はより顕著であった。

[Format-H07]

論文審査の結果の要旨及び担当者

（申請者氏名） 大北 友紀

		（職）	氏　　名	
論文審査担当者	主　査	大阪大学教授	祖父江友孝	印
	副　査	大阪大学教授	服部聡	印
	副　査	大阪大学教授	江口英利	印

論文審査の結果の要旨

飲酒と膵がんとの関連を示すいくつかの研究結果が報告されているが、これまでに得られている研究結果は一致していない。本研究は、多目的コホート研究のデータを用い、調査開始時のアンケートで飲酒習慣の回答が得られ、がん既往のなかった男女95,812人を対象として、1995年から2013年まで追跡を行った結果に基づいて、飲酒と膵がん罹患リスクとの関連を評価した。その結果、男性または女性のいずれにおいても、調査開始時の飲酒量と膵がん罹患リスクに統計学的有意な関連はみられなかった。また、男性において行ったフラッシング反応有無や喫煙習慣での層別解析においても、統計学的有意な関連はみられなかった。一方で、調査開始時から5年間に飲酒習慣が変化しなかった男性においては飲酒量と膵がん罹患リスクの有意な関連が認められ、特に非喫煙者に限定した場合はその傾向はより顕著であった。本研究結果は試験デザインの工夫により飲酒の膵がん罹患リスクへの関連を示唆するものであり、本論文は学位に値するものと認める。